

【研究実践校 全体授業研究会（高学年）】

参 加 者：就將小職員 県小体研執行部 2 名

境小 1 名 米子市 5 名

指導助言：愛媛大学 日野 克博 教授

オブザーバー：県小体研 長谷川 誠一 顧問



○協議の柱

活動の中で、グループ活動における協働的な学びが達成されていたか。

ねらいを達成するための活動や支援になっていたか。

○成果

- ・授業の流れが可視化されたことで、子どもたちも見通しがもて、積極的な参加につながった。
- ・友だちをパーソナルトレーナーとして活動する取組がよかった。  
→チーム分けを意図的に行い、誰にでもアドバイスができていた。
- ・ふり返りの場面で、子どもが自分の課題について、解決方法を検証した様子を伝える場面があった。  
→自らの活動に問いをもって取り組んでいる様子がよかった。

○課題

- ・明確に役割分担をすることで、もっとアドバイスが増えたのではない。  
→アドバイスをもらう側が、見てほしい視点を伝えてから運動をしてはどうか。  
→秘伝の書には多くの視点が示されていたが、動きを「広げる」視点と「高める」視点が整理されるとより効果的である。
- ・各グループでの子どもの伸びや体力の高まりをどう捉えるのか。  
→子どもの意識は達成感や喜びに偏っていた。ふり返しボードでは「楽しさ」と「できばえ」の2軸で評価していたが、体づくり運動では、動きが身に付いた、または身に付けようとしていたことがねらいであり、数値の向上だけが評価の対象ではない。
- ・本時の学習では何をもってできたなのか。（友達へのアドバイスか自分の力の伸びか）  
（指導者）子どもたちは自分の力の伸びを評価していた。  
（指導助言）本時のめあてが「あなたのアドバイスで、・・・みんなの体の動きをレベルアップさせよう」とズレがある。